

個人の経験の意味付けや解釈を探求する研究の意義はいかに個別性を超えるか
How does significance of research that explores the meaning and interpretation of personal experiences exceed the individuality?

伊藤 翼斗¹⁾
Yokuto ITO

大河内 瞳²⁾
Hitomi OKAWACHI

香月 裕介³⁾
Yusuke KATSUKI

¹⁾ 京都工芸繊維大学 基盤科学系
Faculty of Arts and Sciences,
Kyoto Institute of Technology

²⁾ 神戸大学
Kobe University

³⁾ 神戸学院大学
Kobe Gakuin University

¹⁾ E-mail: yokuto@kit.ac.jp

(2023年6月30日原稿受理 2023年10月26日採用決定)

サマリー

本研究では、質的研究の意義について検討するため、「個人の経験の意味付けや解釈を探求する」という側面を持った質的研究に限定し、論文内において個別性を超えてどのような意義が提示されているのかについて調べた。そのために、日本質的心理学会が発行している『質的心理学研究』および『質的心理学フォーラム』の論文・論考における記述について分析した。その結果、「既存のものとは異なる手法を提示するという意義」、「先行する理論・概念に貢献するという意義」、「読み手の気づきや経験の機会を提供するという意義」という三つの意義が見出された。また、「個人の経験の意味付けや解釈を探求する」質的研究の論文は読み手に対して触発するという影響を与えることを述べた。さらに、このような論文は読み手と与えられた情報をただインプットするだけの存在ではなく、テキストを読み、考え、行動する能動的な存在として位置付けていることを明らかにした。

キーワード

質的研究、研究の意義、読み手、触発、能動的な読み

1. はじめに

近年、人を対象とする質的研究が盛んになってきた。文化人類学や社会学、看護学、教育学、心理学など非常に広い領域で質的研究は世界的な広がりを見せている（八木, 2015）。一方で、質的研究で得られた知見を発表すると、例えば「その研究協力者は母集団を代表しているのか」、「研究協力者が少なすぎるのでは」、「その結果は一般化できるのか」、「分析者の主観的な解釈なのでは」、「その研究結果は当たり前のことを言っているに過ぎないのではないか」といった、量的研究の視点を背景にしていると思われる批判を受けることは、質的研究を行なっている研究者は誰しも経験したことがあるのではないだろうか¹⁾。あるいは、実際に論文として投稿しようとしても、質的研究の強みであるデータと記述の厚みを支える紙幅が発表媒体に用意されていないこともあるだろう。これらの状況の背景には、質的研究のパラダイムへの理解がまだ十分に広まっていないことが考えられる。

質的研究を行なう研究者は、このような困難さがあるにも関わらず、なぜ質的研究を選択するのだろうか。それは、量的研究では得られにくい意義を研究者が質的研究に感じ取っており、研究者の関心が研究対象の質的側面に向いているということが大きな理由であると考えられる。本稿では、この質的研究の意義について焦点を当てる。質的研究の意義を整理することで、質的研究に携わる研究者が自身の研究を行なっていく上での理論的基盤を構築する一助となるだろう。しかし、質的研究にも多くの研究手法があり一様ではないため、特に上記で示したような批判を受けやすいと考えられる「個人の経験の意味付けや解釈を探求する」研究において、どう意義が記述されているか分析する²⁾。その上で、個別的であるこのような研究が、研究の意義において個別性をいかに超えるのかについて考察する。

2. 研究の意義に関する先行研究

研究を行なう時、そもそもその研究にはどのような意義があるのであろうか。Maxwell (2012) は研究の意義を、個人的な意義 (personal goals)、学術的な意義 (intellectual goals)、実践的な意義 (practical goals) の三つに分けた。

個人的な意義については、これまでさほど重要視されてこなかったように思う。なぜなら自然科学的な考え方においては研究者の影響は「できる限り排除するように研究はデザインされる」ことで「研究の客観性を高め、またその際に研究の対象となる人びとの主観的見方ばかりでなく、研究者の側の主観性をも消し去ろうとする」(フリック, 2011, p.15) ためである。その結果、個人の興味関心は研究者側の主観性の一つとして除外されてきた。しかし近年では、質的研究、特に社会構築主義（普遍的なリアリティはなく、個人の相互作用の結果、意味が社会的に構築されるという立場）の影響を色濃く受ける研究において、研究者自体のあり方も研究にとって重視されることになり、研究者の個人的意義についての言及も増えてきた。例えばプラサド (2018) は、①新しいアイデアとナラティブ・スタイルを楽しむ者、②多彩なディテールを研究することに喜びを見出す者、③多様な人と多様な方法で関わることを好む者、④組織の世界の不条理・複雑性・パラドクスに関心を向ける者、これらの人物が質的研究を遂行することで個人的な喜びと興奮を見出すとしている。

次に、学術的な意義はどこにあるのであろうか。フリック (2011) は質的研究について以下の点を指摘している。

- ・限定つきのナラティブに対応する新たな理論を実証的データから生み出す
- ・人と状況に結びつきのある主張を、実証的に根拠のある形で生み出す
- ・例外的な／複雑な人物や状況もよく取り上げる

量的研究では、一般化して広く適用できる理論の生成が目指されるため、この指摘にあるような、限定つきのナラティブ、人と状況に結びつきのある主張、例外的な／複雑な人物や状況には目が向けられにくい。フリックの指摘においては、量的研究が見落としがちな箇所を補う、あるいはその箇所から新たな創造性を生み出すものとして質的研究が位置付けられていることがわかる。学術的な営みを、先人の知見に自身の知見を付け加えていくものだと考えるならば、量的研究が積み上げてきた知見を補うこと、量的研究では生み出せなかった新たな理論を創造することが学術的な意義として挙げられるのは当然であると思われる。フリック（2011）が述べるように「量的研究の限界が質的研究を用いる出発点とみなされてきた」（pp.14-15）のである。

最後に実践的な意義についてであるが、質的研究者の多くはしばしば実践への影響に言及する。このことに関して無藤（2013）は、質的研究と実践との関わりの発展の方向について下の四つの観点から整理している（p.257）。

- ・現場性：現場感覚は現場に身を置くことの意味の生かし方である。その場のリアリティ感覚と違和感としての検出を共に可能にする。
- ・生成性：生成過程そのものを記述する。変化を引き起こすものと変化自体とが一体的であることの様相である。
- ・対話性：実践に共に向かい合いつつ対話し、そこから他の場への通用性を探る。
- ・パーソナル性：パーソナルな声としての研究を可能にする。関わる時の自分の感覚を保持し、そのうえで表現を通して共通性を求める

また、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを提唱する木下（2003）も質的研究の知見は現場に還元され、現場の改善に役立つかどうかを評価されるべきだと述べている。このように、研究結果が実践へ与える影響についての言及は枚挙にいとまがないほど多い。一方で、どのような理路で実践に影響を与えることができるのかに関する知見はあまりなく、その理路の整備が必要である（この点は本稿5節で詳しく見る）。

以上で挙げた先行研究は質的研究における意義の理論的な説明である。しかし一方で、実際に個別的な研究を行なう研究者たちが具体的に何を意義として提示しているのかも見る必要がある。そこで本稿では、実際に論文中で研究者たちがどのようなことを自身の研究の意義として挙げているかを見た。

3. 分析方法

まず、「はじめに」の節でも述べたように、質的研究にも多くの研究手法があるため、第1節で示した批判を受けやすいと思われる「個人の経験の意味付けや解釈を探求する」という側面を持った研究に限定する。こうした個別性を重視する研究の目的が個人の経験の意味付けや解釈だけに留まるものであるならば、その研究が個別性に閉じこもることとなり、研究の意義が

見出せなくなる。しかし、研究である以上、個別性を超える意義があるはずで、論文内で意義に関する記述が何らかの形で示されるはずである。そこで本稿では、論文内において個別性を超えてどのような意義が提示されているのかについて明らかにする。そのために、筆者らは日本質的心理学会が発行している『質的心理学研究』および『質的心理学フォーラム』の2015年までの論文・論考（計187本）から、①分析結果が協力者個人の経験の個別性を超えたものになっていないもの（一般化された構造やプロセスを抽出する研究ではないもの）、②論文の目的において、研究協力者個人の経験を記述する旨が書かれているもの（例えば「彼女たちが...をどう捉えているのかを明らかにする」といった記述があるもの）、という二つの基準に該当する17本を分析対象とし、そこでどのように意義が示されているのかを分析した。

『質的心理学研究』および『質的心理学フォーラム』を選んだ理由は、「質的」と学会名に冠していることからわかるように、日本質的心理学会が質的研究の推進・対話の場の構築・教育と相互研鑽・方法の開発・情報発信を目的としており、質の高い質的研究が両誌に収められていると判断できるからである。また筆者ら全員が当該学会に所属していることから、両誌へのアクセスが容易で、共同研究がしやすかったことも挙げられる。

分析に際しては、二つの基準に該当する17本の論文における該当する記述を、一つの記述あたり一枚のカードに写した。この時、同一論文内に複数の意義が記述されていた場合は、別々のカードに転記した。その後、筆者らで一つ一つどのような意義を提示しようとしているのか議論した上でグルーピングを行なっていった。なお、この作業は必要に応じて原文にも戻りながら実施した。グルーピングが終わった段階で、それぞれのカテゴリーがどのような意味で個別性を超えているのかを考察した。考察の際には論文の投稿者がアクセス可能な『質的心理学研究』の規約 (https://www.jaqp.jp/doc/JJQPkiyaku2020_11.pdf) も参考にした。規約のうち本研究に関わるのは16で、下に引用する（下線は筆者らによる）。

16. 査読の結果をもとに、下記の審査方針に従って編集委員会の責任で最終的な審査を行う。審査方針としては、研究の理論的・方法的な面における学界への新たな貢献やオリジナリティ、研究の質の高さを重視し、肯定的な側面を積極的に評価する。たとえば、研究視点の斬新さ、研究方法の開発、研究対象者の選定、データ分析の工夫、データの貴重さや面白さ、研究結果の提示の仕方の工夫、論文をまとめる構成力や文章力など、多面的な観点から論文の肯定的側面の発見に努める。

ここでは審査方針が書かれており、意義に関わる部分は下線の「研究の理論的・方法的な面における学界への新たな貢献」が該当すると思われる。

4. 分析結果

分析した結果、論文内で示された意義には、大きく分けて「既存のものとは異なる手法を提示するという意義」(4.1)、「先行する理論・概念に貢献するという意義」(4.2)、「読み手の気づきや経験の機会を提供するという意義」(4.3) という三つがあることがわかった。なお、この三つはあくまでも本研究の分析対象で示された意義であり、分析対象を広げると更に別の意義が示される可能性もある。以下、それぞれについて例を示しながら見ていく。引用元となった文

章はイタリック体で示し、引用内の「……」は筆者らによる中略、「[]」は筆者らによる注記をそれぞれ表わしている。また、各引用の末尾には丸括弧で、著者、媒体（『質的心理学研究』は「研」、『質的心理学フォーラム』は「フォ」と示す）と掲載号、ページをまとめて示している。

4. 1. 既存のものとは異なる手法を提示するという意義

先行する同領域の研究とは異なる手法を提示できたことが意義として挙げられているものをまず見たい。例として、次の引用を示す。

今回用いられた方法は……今後の方法論の展開に対して1つの刺激となりうるだろう。
(能智、研5、p.48)

ここでは方法論への刺激という意義が明確に述べられている。このように手法に着目した意義が示されることはしばしばある。個別的なものを分析するために利用した方法論が、その個別性を超えて後続する研究にも影響を与えるというあり方で、個別性を超えた意義を提示しているものである。

4. 2. 先行する理論・概念に貢献するという意義

4.1 では手法に着目した意義であったが、ここで見るのは理論や概念に焦点を当てた意義である。具体的には「先行する理論・概念を捉えなおす事例を提示する」、「先行する理論・概念を実証する事例を提示する」という事例を提示するものと、「先行する理論・概念と異なる視点を提示する」ものがあつた。それぞれの事例は次のようなものである。

先行する理論・概念を捉えなおす事例を提示する

障害者問題の研究において「軽度」を設定することは、「障害者」を一くくりにできないことを示し、障害者－健全者という二分法では障害者問題をとらえきれないことを示す意義があると考えられる。(田垣、研1、p.52)

先行する理論・概念を実証する事例を提示する

本研究では、かつて青井が指摘したことが、……アクチュアルに見出され、了解可能な存在への一歩を踏み出した、ということにもなるであろう(小倉、研2、p.80)

先行する理論・概念と異なる視点を提示する

本稿の考察は、高齢者医療が「延命治療」か「自然な看取り」かの二項で括られることによつて、本来目指すべき「高齢者と過ごす家族の穏やかな日常」という視点を見失っている状況や、治療方針の決定のみに終始してしまいがちな実際の医療現場のインフォームドコンセントを問い直すものであると考える。(水岡・藤波、研13、p.250)

これらは捉えなおし・実証・視点提示というように方向性の違いはあれど、いずれも先行研究で示されてきた理論や概念に何らかの貢献をするというものである。個別的な研究を行なう

ことによって、これまでの理論・概念の補強や矛盾点の指摘が可能になるというあり方で、研究自体の個別性を超えた意義を示しているのである。

4. 3. 読み手の気づきや経験の機会を提供するという意義

4.1 および4.2 は既存の研究に対する貢献であったが、ここで見るものはそれらとは全く異なる側面による意義であると言える。つまり、読み手の存在を積極的に意識し、その読み手への働きかけを意義として見出しているものである。この意義に関わるものとして「研究協力者について読み手が理解する機会を提供する」、「読み手の追体験の機会を提供する」、「研究結果を読み手自身の経験につなぐ機会を提供する」の三つがあった。なお、5.1 で詳述するが、本稿においてこのカテゴリーこそが、本稿が対象とする質的研究の強みであると考えているもの。各事例を以下に示す。

研究協力者について読み手が理解する機会を提供する

GID [性同一性障害] 当事者の内的世界を内側の視点からみることが、臨床的援助を必要としている当事者を理解する一助にもなるだろう。(涌井、研5、p.28)

読み手の追体験の機会を提供する

読者にも、……味わってもらえるのではないか。逆に言うと、そのような読み方へ読者を巻き込み、身体的な「感じ」を軸にした知を生み出そうとするところに、……特徴と意義がある。(大倉、フォ5、p.21)

研究結果を読み手自身の経験につなぐ機会を提供する

筆者の一人称の経験を、他のフィールドに生きる研究者の経験へとつなぐための嚆矢としたい。(石田、フォ7、p.37)

これら三つは読み手の変化に焦点を当てた意義である。読み手が理解し、読み手が追体験し、読み手が自身の経験へとつなぐ。ここで言う読み手の変化とは、読み手に新たな知が創出されることを意味する。いずれも先行研究で示された理論や概念に間接的には影響を与えるかもしれないが、それよりもむしろ読み手の変革を目指す意義であると言えるだろう。

5. 考察

個人の経験の意味付けや解釈を探求する研究は、単に個別性に閉じこもっているのであれば研究の意義が見出せなくなるだろう。意義とは誰かの、あるいは何かの役に立つことであるとするならば、意義を記述する際には個別性をどのように超えるのかの記述がなされるはずである。そこでまず5.1 ではどのような意味で4節で見てきた数々の意義のあり方が個別性を超えようとしているのかを考える。次の5.2 では、質的研究の意義として度々言及される「読み手の気づきや経験の機会を提供する」意義について取り上げ、どのようなバリエーションがあるのかについて検討する。最後の5.3 では、この「読み手の気づきや経験の機会を提供する」意義がどのような理路によって可能なのか考察したい。

5. 1. どのような意味で個別性を超えているのか

まず、4節で見てきた意義を以下に再掲する（便宜上A～Cを併せて示す）。

A：既存のものとは異なる手法を提示するという意義

B：先行する理論・概念に貢献するという意義

C：読み手の気づきや経験の機会を提供するという意義

個別的な経験を対象に生まれたこれら三つの意義は、いかにその個別性を超えているのだろうか。

AとBは「既存の理論や方法論につなげる」というあり方で個別的な知見を、その個別性を超えて意義のあるものとして提示していると言える。これはいわゆる「学術的意義」に沿うものと考えられる。このような意義は量的研究でも積極的に言及されており、全ての読み手に共有されうる一般化した意義である。このAとBの意義は3節で示した規約の「研究の理論的・方法的な面における学界への新たな貢献」という箇所に該当すると言える。

一方、Cは分析結果の個別性を「それぞれの読み手がそれぞれの意義を見出す」というあり方で超えようとしている。ここには従来の意味での一般化とは異なるあり方で個別性を超えようとしていることが見て取れる。知見に触れた読み手が何かに気づき、あるいは追体験し、自身のフィールドで何らかの変化を生じさせる。ここでの知見は、全ての人に共有されうるという意味での一般化ではなく、それぞれの文脈を生きるそれぞれの読み手に多様なあり方で共有されうるという意味での一般化となる。言い換えるならば、AとBの意義においては読み手の質的な異なりは想定されていないが、Cの意義にとって読み手ひとりひとりの異なりは決定的に重要なのである。このCの意義は、3節で示した査読の審査方針の対象とはなっていない。審査方針に書かれていないにも関わらず、論文内においては言及されていることから、論文の著者にとっては重要な意義であることがわかる。

AとBの意義における一般化と、Cの意義における一般化は異なる意味合いを持つものである。AとBの意義は量的研究においても積極的に言及されると述べたが、これはAとBにおける一般化が従来の自然科学を志向したものであるためであろう。一方、Cの意義における一般化はあくまでひとりひとりの読み手に委ねられている。ある読み手にとっては論文で示された知見が全く意味をなさず、理解されず、活用もされないという状況もありうるだろう。また別のある読み手においては、同じ論文での知見に多大な影響を受け、自身の現場の理解が進み、大きな変化を現場にもたらすかもしれない。そのような意味で、Cにおける一般化は可能性として読み手に開かれているのである。メリアム（2004）はこのような一般化を「読者あるいは利用者の側の一般化可能性」（reader or user generalizability）という用語で捉えている。従来の自然科学を批判する形で質的研究が発展してきたことを考えるならば、このような意義が質的研究の論文内で言及されることは当然とも言える。

以下では、このCの意義のバリエーションについて考えたい。

5. 2. 読み手の気づきや経験の機会を提供するという意義のバリエーション

4.3で示したC「読み手の気づきや経験の機会を提供するという意義」にはどのようなバリエーションがあったのかを再掲する（便宜上C1）～C3）として示している）。

- C1) 研究協力者について読み手が理解する機会を提供する
- C2) 読み手の追体験の機会を提供する
- C3) 研究結果を読み手自身の経験につなぐ機会を提供する

C1) は、想定される読み手が研究協力者について認知していない、あるいは理解に問題がある状況で提示される意義と言える。このことはマイノリティ研究等にとっては重要であり、現状を知ってもらうこと自体が意義の一つになりうるものである。そのため、報告の意味合いが強く、C1) から C3) の中では 5.1 で見た学術的意義と親和性が高いと思われる。なぜなら、知られていない現状について情報を広く提供することは、新たな理論や方法論を生み出す可能性を持つからである。

次に C2) は、テキストを通してある状況を読み手が追体験することによって、研究協力者が実際に体験した感じや雰囲気といったものを読み手にも実感させるというものである。ここでの「追体験」はいかにして可能なのであろうか。一見すると、読み手が論文に記された行為者と同一化することで可能になると考えるかもしれない。ただ、この同一化による理解は、ディルタイ (1973) によって否定されている。ディルタイは人間の行為の意味を理解することにおいて、同一化によって理解がなされるのではなく、行為者と解釈者の同質性を基盤とした感情移入によってなされることを指摘した。本稿での議論に沿って説明すると、研究協力者の語りを読み手が理解可能なのは、読み手が研究協力者と同じ性質を持っていることが基盤となっているからである。同じ性質を持っているからこそ、研究協力者の語りに読み手は感情移入できるのである。つまり、C2) の「追体験」は、ディルタイの言う同質性を基盤とした感情移入によって可能であると考えることができる。このことから、読み手と研究協力者が（程度の差はあれ）同質であることが前提とされるパラダイムを背景とした研究方法と相性が良いことがわかる。

最後の C3) は、C2) と似てはいるが、C2) の力点は追体験される行為者や状況に置かれており、C3) は読み手に置かれている点で異なる。読み手は読み手で独自のフィールドを持ち、読み手がテキストを通して研究協力者の語りに触れることで、そこで語られていることをいかに自身のフィールドで活用できるかを考えていく。柳瀬 (2018) は、このように「いかに研究を利用するかという実践的問いかけをもって研究を読み込む」(p.28) ことを実践的読解と述べている。この読み手による実践的読解によって、5.1 で見たメリアム (2004) の「読者あるいは利用者の側の一般化可能性」は読み手の実践に結実するのである。この時、読み手は読み手で独自の（つまり読まれる論文内の行為者とは異なる）フィールドを持つことが想定されるため、読み手と行為者が異質である、あるいはより正確に言えば、異なる実存であることが前提となっている。ガダマー (2012) は他者の理解について「他者に身を置き換えたり、そのひとの体験を追体験したりすることではない」(p.680) として、理解が歴史や文化といった実存に基づいてなされることを指摘した。そして、読み手は自身の実存を背負った状態でテキストに何らかの先入見を持ちつつ読み、その後テキストを深く読み込むことによってテキストの側からその先入見が修正を受け、先入見は練り上げられていくことになる。そのことによって読み手が自身の眺めの地平を発展させるということがガダマーの他者理解なのである。このガダマーの指摘を受け継ぐならば、C3) の意義において、論文内の行為者にはその行為者固有の歴史や文

化があり、その論文の読み手にも同様に読み手固有の歴史や文化があり、異なる実存を前提にした理解を求めていると言える。つまり、C3)は読み手と研究協力者が異質であることが前提とされるパラダイムを背景とした研究方法と親和性があると思われる。

以上のように、読み手の気づきや経験の機会を提供するという意義にはバリエーションがあるが、それは読み手をどのような存在として位置づけるかによる違いであることがわかるだろう。

5. 3. 「読み手の気づきや経験の機会を提供するという意義」はいかに可能か

読み手が変化する機会を提供することがこの節で見てきた意義の特徴であるが、では、そもそもその変化はなぜ可能なのだろうか。

個人の経験の意味付けや解釈を探求する際にしばしば研究協力者の語りをデータ／テキストとして採用するため、そのデータ／テキストは物語の形式に非常に近いものとなるだろう。物語は「通常では経験できないであろう生の状況、感情、情動、そして出来事を経験」させ「我々を巻き込む傾向をもつ」(ヴァン＝マーネン, 2011, pp.115-116) ことから、多くの質的研究の記述も必然的に読み手を巻き込むこととなる。鯨岡 (2012) は、質的研究の記述を読むという行為が、読み手に変容をもたらすほどのインパクトを持ちうることを指摘しているが、それは読み手の巻き込みがあるからこそ達成されやすくなっているのである。また、読み手にとっては単に巻き込まれるだけではない。イーザー (2005) によれば、読み手とテキストの相互行為によってテキストの意味が生み出されるため、テキストの意味は読み手によって異なる。このことによって、読み手は巻き込まれる経験を契機に、積極的に意味を創造することとなる。つまり、読むという経験が読み手を「触発」(村上, 2016)するのである。村上 (2016) によれば研究で見出された知見は、個別の事例のなかでこそ意味を持ち、それぞれの語り固有の文脈に裏打ちされた時、読み手を触発する。ここで「語り固有の文脈」と言われているのは、おそらく質的研究の強みとされる厚い記述のことであろう。厚い記述によって触発された読み手には、自身の実践を深く省察したり、新たな実践を組み立てたり、他者との知見の共有を行ったりする潜在的な素地が生じることになる。その素地のことをメリアム (2004) の「読者あるいは利用者の側の一般化可能性」は指しているのである。

以上のことを考えた時、柳瀬 (2018) がすぐれて実践的な物語とそうでない物語とを判別する時の方法の一つとして「読み飛ばすことができるか、できないか」を挙げていることは非常に示唆的である。読み飛ばせるということは、結果だけ見て何がわかるということである。質的研究においては結果のみを取り上げたところで意味が薄く、その結果に至るまでの厚い記述があるからこそ、あるいは村上 (2016) の言葉で言い換えるなら語り固有の文脈に裏打ちされた時こそ、触発が生じることになり、論文に実践的な意義が生まれることとなる。その厚い記述を読み飛ばすことは、実践的な意義を手放すことと同義である。実際には結果や結論だけを読んだところで、そこで書かれたことを理解するのは非常に難しいだろう。

6. おわりに

本稿では、質的研究の意義について検討するため、「個人の経験の意味付けや解釈を探求する」という側面を持った研究に限定し、論文内において個別性を超えてどのような意義が提示されているのかについて調べた。その結果、「既存のものとは異なる手法を提示するという意義」、

「先行する理論・概念に貢献するという意義」、「読み手の気づきや経験の機会を提供するという意義」という三つの意義に大別できることがわかった。また、その結果から、「個人の経験の意味付けや解釈を探究する」という側面を持った研究における読み手の位置付けや読み手への影響について明らかにした。

「読者あるいは利用者の側の一般化可能性」という視点が明らかにしているように、論文の形で提供されたものをどうするのか（あるいは、それがどうなるのか）は読み手に委ねられている。どのように読むのか（理解するのか、追体験を行なうか、実践的読解を行なうか）。読む中で、何を得るのか。得たものをどう活用するのか。これらは読み手が自身の歴史や文化を背負って読むことによって達成されるものである。つまり、「個人の経験の意味付けや解釈を探究する」という側面を持った研究において想定されている読み手は、従来の自然科学を基盤とした研究で想定されている顔のない読み手ではなく、ひとりひとり自身のフィールドと関心を持った存在なのである。言い換えるならば、与えられた情報をただインプットするだけの存在ではなく、テキストを読み、考え、行動する能動的な存在と言える。読み手も、このような研究論文を読む時は、研究意義が自分にも委ねられていることを自覚し、能動的な読みをする必要がある。また、その能力が求められてもいるのである。

付記

本研究は、日本学術振興会 基盤研究 (C) 22K00652「日本語教育学における質的研究プラットフォーム構築のための基礎研究」(研究代表者：香月裕介)の助成を受けたものである。

注

- 1) 例えば、高木 (2011) は同類の批判に対してよく理解できるとした一方、「批判される側は、質的研究以外に採用すべき方法論がないにもかかわらず、そのような批判を受けるのは、極めて不本意な思いに駆られるのではないだろうか」(p.50)と述べている。あるいは八木 (2015) は同類の批判について「客観的で普遍的な結果が求められる科学的研究が良いとする実証主義的な「まな板」の上で、質的研究を評価しようとすることに一因がある場合もあるでしょう」(p.37)と指摘している。
- 2) 本稿の内容は、日本質的心理学会でのポスター発表(伊藤・大河内・香月, 2016)、および日本語教育学会でのパネルセッション(香月・伊藤・大河内, 2021)の内容を再構成し、大幅に加筆修正を行なったものである。

【参考文献】

- イーザー, W. (2005) 『行為としての読書』 轡田収[訳] 岩波書店
- 伊藤翼斗・香月裕介・大河内瞳 (2016) 「質的研究の意義から見る読み手の位置付け 一個人の経験の意味付けや解釈を探究する研究を対象に」『日本質的心理学会第14回大会 in 東京』日本質的心理学会 p.59
- ヴァン=マーネン, M. (2011) 『生きられた経験の探究 人間科学がひらく感受性豊かなく教育>の世界』 村井尚子[訳] ゆみる出版
- ガダマー, H. G. (2012) 『真理と方法III 一哲学的解釈学の要綱』 轡田収・三浦國泰・巻田悦郎[訳] 法政大学出版局. (Gadamer, H. G. (1975). *Wahrheit und Methode: Grundzüge einer*

philosophischen Hermeneutik. J. C. B. mohr (Paul Siebeck): Tübingen.)

- 香月裕介・伊藤翼斗・大河内瞳 (2021) 「質的研究を研究する ―日本語教育学における質的研究の体系的枠組みの構築を目指して」『2021 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会 pp.22-31
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い』弘文堂
- 鯨岡峻 (2012) 『エピソード記述を読む』東京大学出版会
- 高木廣文 (2011) 『質的研究を科学する』医学書院
- ディルタイ, W. (1973) 『解釈学の成立』久野昭[訳] 位文社. (Dilthey, W. (1957). *Die Entstehung der Hermeneutik. Gesammelte Schriften, Bd. V*, Stuttgart, 317-331.)
- プラサド, プシュカラ (2018) 『質的研究のための理論入門 ―ポスト実証主義の諸系譜』箕浦康子[監訳] (Prasad, P. (2005). *Crafting Qualitative Research: Working in the Postpositivist Traditions*. Armonk, N.Y.: M.E. Sharpe)
- フリック, U. (2011) 『新版 質的研究入門 <人間の科学>のための方法論』小田博志[監訳] 春秋社
- 無藤隆 (2013) 「実践志向の質的研究の成り立ち」『質的心理学ハンドブック』やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也[編] 新曜社 pp.239-258
- 村上靖彦 (2016) 『仙人と妄想デートする ―看護の現象学と自由の哲学』人文書院.
- メリアム, S. B. (2004). 『質的調査研究法入門 ―教育における調査法とケース・スタディ』堀薫夫, 久保真人, 成島美弥[訳] ミネルヴァ書房. (Merriam, S. B. (1998). *Qualitative research and case study: Applications in education*. Jossey-Bass.)
- 八木真奈美 (2015) 「質的研究の認識論 ―言葉を使う人間とその世界を理解するために」『日本語教育のための質的研究入門 学習・教師・教室をいかに描くか』舘岡洋子[編] ココ出版 pp.27-48
- 柳瀬陽介 (2018) 「なぜ物語は実践研究にとって重要なのか ―読者・利用者による一般化可能性」『言語文化教育研究』16 言語文化教育研究学会 pp.12-32
- Maxwell, J. A. (2012). *Qualitative Research Design: An Interactive Approach*. (3ed Ed.). Sage

How does significance of research that explores the meaning and interpretation of personal experiences exceed the individuality?

Summary

The present study examined what significance is presented beyond individuality within the qualitative research that “explores the meaning, making, and interpretation of individual experiences.” We analyzed the descriptions in the qualitative research articles of two Japanese journals published by the Japanese Association of Qualitative Psychology. We found three significant aspects: (1) presenting a new method, (2) contributing to prior theories and concepts, and (3) providing opportunities for readers to become aware of and relive others’ experiences. We also noted that qualitative research papers have an inspirational impact on the reader. Furthermore, we clarified that such papers position the reader as an active participant who reads, thinks, and acts upon the text.

Keywords: qualitative research, significance of research, reader, inspiring, active reading